



# キレイゴト



猫ト みかん。

# 月の石

---

少女が、うん、と手を伸ばしている。

白い腕は真っ直ぐ、天を求めて迷わない。

丘の上。風がゆるく吹いている。

少女の長い髪が、一糸二糸と空を泳ぐ。

「何をしているの？」

僕は彼女の斜め後ろに立って、尋ねた。

「太陽の光を集めているの」

少女は振り返らずに言った。

彼女が手に掲げるのはごつごつとした白い石。

「お月さまを作るのよ」

少女が言葉を継ぐ。

白い石は少女の手の先できらきらと陽光を浴びて輝いていた。

「お月さまはそんな不恰好じゃあないよ」

僕は尻尾をゆらりと振った。

鼻先を草の緑が掠める。

「いいのよ。わたしのお月さまだもの」

少女は誇らしげに、ぴんと腕を張った。

ふむ、と僕は鼻を動かして、一度くしゃみをした。

太陽があんまり眩しくて、むずがゆくなったんだ。

## 涙雨

---

ざあざあざあと雨が降っていた。

雨の日は、僕は嫌いだ。

だって、自慢の毛並みが湿気を吸って重たくなってしまうもの。

雨の日は、屋根のある場所で、毛づくろいをしているのが一番さ。

けれども僕の目の前で、ざあざあの雨の中、傘も差さずに突っ立っている青年が一人いる。

「こっちに入りなよ。馬鹿みたいに濡れてないでさ」

閉店した喫茶店の軒下から僕が言った。

「放っておいてくれ」

喉が痛くなるような声で青年が言う。

髪はペしゃんこで、お化けみたい。シャツやズボンが肌に貼り付いて気持ちが悪そうだ。

そんなところで感傷に濡れるより、あたたかいミルクでも飲んで少し眠ったほうがいい。

僕はしごくまっとうなアドバイスをしようと思ったけれど、黙って欠伸をするだけにしておいた。

雨が降らなきゃまともに泣けもしないだなんて、男っていうのは本当に馬鹿な生き物さ。

仕方がないから祈ってあげよう。

僕は雨は嫌いだけれど、ねえ、彼のためにもう少し止まらずに降り続けておくれ。

## 夏とソーダ水

---

ソーダ水っていうのは、世界で一番きれいな飲みものだと思う。  
ビーナスの誕生みたいな神秘的な泡が立ち、教会の鐘のように氷が清らかな音を鳴らす。

きんきんに冷えた開けたてのやつがいい。まあ僕は飲まないけど。だって、舌がぴりぴりするじゃあないか。

「ねえ、ぬるくなっちゃうよ」  
僕は、ソーダ水の入ったグラスを前にしたまま頬杖をついて呆けている彼に言った。

「ああ」  
彼は気のない返事で、2階のテラスから、庭の浮かれたパーティを見下ろしている。

庭では、シャンパンやワインを手に着飾った人々が、乾杯をしていた。  
白いドレスを着た女性が、2階の彼に気がついて白い手袋をした手を振る。  
彼は重たそうに手を上げて、指先だけ小さく動かした。

「泡が抜けちゃったら、ただの甘い砂糖水だ」  
僕が前足でグラスを小突くと、最後の氷が小さな音を立てて消えた。

「うん。それがいいよ。眉をしかめるくらい、甘ったるい砂糖水になればいい」

下の庭では、白いドレスの彼女とタキシードを着た男性がキスをして、喝采を浴びているところだった。

うーみー！

---

海のすぐ近くの、かき氷屋さんで僕は昼寝をしていた。  
ウッドデッキに3つ並んだ、一番左端のテーブルの下が僕の特等席だ。

潮風にヒゲをそよがせながら、夕暮れ時の甘い睡魔にまどろんでいると、  
「好きだー！！」  
という大きな声がして、びっくりして尻尾がびびっと突っ立った。

「何事なの？」  
声のした海のほうを見ると、青年の細い背中が見えた。夕陽が赤々とシルエットを縁取り、砂浜に黒々と影が伸びている。

何だろう、と気になったけれど、傍に行こうとは思わなかった。だって、あんなに波の近くにいるんだもの。濡れちゃうじゃないか。

「時々ねえ、ああいう人が来るの」  
かき氷屋の女主人が、僕の前に白い小皿を置いて言った。冷たいミルクがなみなみと注がれている。  
「ああいう人って？」  
「叫ぶ人」  
「そのまんまだね」  
僕は肩をすくめられない代わりに尻尾をひとつ振って、冷たいミルクを舐めた。

「この世界に海があって良かったわ」  
水平線を見つめて、愛おしそうに彼女が言った。  
僕も顔を上げて海を見る。青年もまだ海を見ていた。

## 氷結の花

---

「ファウストの言葉を知っている？」

彼は旅人だった。

教会の階段に腰かけている。

僕は手すりの小さな影に身を縮こまらせていたが、彼の座っているところは日なただ。

草を渋くしたようなくすんだ色のハンチングをかぶっていた。隣りには大きなリュックサックが置いてある。

「僕にゲーテが読めると思う？」

「読めるさ」

「嫌だね、哲学なんて」

「哲学じゃない。小説だよ」

彼は笑って、リュックサックから透明な箱を取り出した。氷の中に一輪の薔薇が閉じ込められている。

彼がふたを持ち上げると、冷気が空気中に広がるようだった。

僕は思わず首を伸ばして、その冷気に鼻をうごかした。かすかに薔薇の香がするような気がした。気のせいだったかもしれない。

「瞬間よとまれ、おまえは美しい！ってね」

太陽の下で、氷づけの薔薇はきらきらと輝いていた。つい、と表面を水滴が一粒流れる。

「時間を閉じ込めてるの？」

「そう。綺麗だろう？」

彼はふたを被せた。冷気が遮断され、辺りは再び夏の熱気に支配される。

「いつかは溶けてしまうよ」

「そうだね。ねえ、溶けてしおれた薔薇は、それでも美しいだろうか」

リュックサックに氷結の薔薇を仕舞いながら、彼は言った。

答えを求めない言い方だったので、僕はそれには応えずに、立ち上がる彼を見上げた。

「旅立つの？」

「うん。北のほうへ」

よいしょとリュックを背負って、彼は立ち去る。

陽炎の立つ彼の後姿を、僕は少しの間だけ見守った。

## 真夏の夜の夢

---

男の人と女の人が手に手をとって走っていった。  
笑いながら走っていった。

少し経って、男の人がまた一人走ってきた。  
「君、ここを若い男女が通らなかったかい？」  
息を切らせて、男の人が尋ねる。

「通ったよ。どうしたの？ 随分険しい表情だ」  
僕は欠伸をしながら言った。夜も深い時間だ。  
星明りが彼の顔を青白く照らす。

「駆け落ちなんだ」  
苦々しい声で彼が言った。  
「楽しそうに走っていったよ」  
僕は応えた。  
「愚かなことだよ」  
辛そうに彼は言って、ありがとうと呟くと再び走っていった。

しばらくすると、今度は女の人が一人走ってきた。  
「あの、男の人がここを走ってこなかった？」  
息を切らせて、彼女が尋ねる。

「通ったよ。まったく今夜は何事なの」  
うとうとしかけたところを起こされた僕は、少し不機嫌だ。

「ああすみません。ねえ彼はどっちへ？」  
女の方は必死に両手を組み合わせて言った。  
「駆け落ちの二人を追いかけて、あっちのほうへ行ったよ」  
僕は星明りに浮いた白い路地を示した。

「あちらね。ありがとう」  
女の方はつまずきながら、走っていった。

僕は一つ欠伸をする。  
パズルのピースみたいに、ぴったり皆が上手くいけばいいけれど、なかなかそうもいかないもんだ。

## 背伸びをする少年

---

塀の上で昼寝をしていたところ、急に足元を叩かれて、僕はびくりと尾を立てた。

目を開けて見下ろせば、塀の下で少年がうん、と手を伸ばしている。  
その指先は、あと少しで塀の頭、というところだ。

はぁ、と息を吐いて少年は爪先立てていた踵を落とす。  
すとん、と少年のつむじが下がった。  
睨むように見上げる先は、僕の少し手前だ。

視線を追うように顎を上げると、まあい夏みかんがなっているのが分かった。  
塀の向こうに突き出した枝が、その重みでわずかにたわんでいる。

少年の目的は、その夏みかんらしい。  
ぐっと膝を曲げると、えい、と飛び上がった。  
けれども、指先を掠めもしない。

無理だろう、届かないよ、君の背じゃ。と僕は思った。  
しかし少年はそうは思っていないようだった。  
ジャンプをしたり、背伸びをしたり、諦める様子はない。

僕は立ち上がって、枝をゆすってやった。  
夏みかんは重力に従って、労もなくぽとりと枝からはずれて落ちる。

「わ」  
少年は慌てて手の平を広げてそれを受け止めた。

受け止めた瞬間、ほんの一瞬だけ、悲しそうな顔をした。  
あ、と僕は思った。  
少年は夏みかんが欲しかったわけじゃなかったのだ、と遅まきながら気がついた。  
自分の手で、それを取りたかったのだ。

「どうもありがとう」  
少年は夏みかんを胸の前で両手に持ち、丁寧に頭を下げた。

大人びたその優しさに、僕は少しだけ泣きそうになった。



# かき氷

---

「もう、夏も終わるねえ」

かき氷屋の女主人が、よく日に焼けた手で、かき氷機のレバーを回す。  
さりさりさりと音がして、透明な器に澄んだ氷がはらはらと重なっていく。

「夏が終わったらどうするの？」

僕はかき氷機の隣りでそれを見つめながら、尋ねた。

「息子夫婦のところでのんびんだらりの生活さね」

彼女は言って、口元に皺を作る。嬉しいのか寂しいのか、僕には判断がつかなかった。

透明な器に、半透明な氷の山が淡く築かれる。まだ暑い夏の日差しが反射して、僕はしかめるように目を細めた。

「えーと」

彼女の手がシロップを迷う。

「ミルク！」

僕は注文した。

「ああ、はいはい」

冷蔵庫から、彼女は牛乳の紙パックを取り出した。  
丁寧な手つきで、かき氷に牛乳を垂らす。くしゃり、と氷の山に白い峰ができた。

「おまちどう」

ことりと器を床に置く。  
僕はひとつ飛びで床に着地すると、かき氷に鼻の頭を突っ込んだ。  
冷たい。  
美味しい。

「慌てて食べると、頭がきーんとしてしまうよ」

笑い声が降ってくる。  
言われたとおり、僕は頭がきーんとして、ぶるぶると尻尾を震わせた。

# 盗人

---

石橋の欄干を歩いていると、一人の青年がたそがれていた。青年というにはまだ若いかもしれない。夕陽が彼の前髪を明るく照らしていた。

「ねえ、世界が終わる日の夕陽みたいじゃない？」  
青年が言った。  
僕は夕陽に目を向けてみる。眩しくて、目を眇めた。

「別に、いつもと同じ夕陽だけど」  
「そうだよねえ。俺もそう思った。言ってみただけなんだ」  
息だけで、青年が笑う。

指先に何かをつまんで、きらきらと夕陽にかざしていた。  
指輪みたいだ。  
「指輪？」  
僕は見たままのことを言った。  
「うん」  
青年の口は笑っていた。「婚約指輪」それだけ呟くと、口元から笑みを消した。

「君の彼女の？」  
おせっかいなことを、僕は訊いた。  
「だったら、良かったんだけどね」  
彼は指輪を放りあげる。くるくるきらきらとそれは回って、再び彼の手の中に納まった。

「どうするの、それ？」  
「さて、どうしよう。彼女、これを失くして泣いていると思う？」  
「そんなの、君のほう知っているだろう？」  
「そうなんだよね」

彼は欄干に腕を乗せ、その上に顎をうずめた。  
夕陽が、世界の向こう側に沈んでいこうとしていた。

## 恋に恋する

---

深い夜よりもまだ黒い飲みものを、女の子が眉をしかめながら一口飲みこんだ。  
唇をへの字に曲げる。

「砂糖とミルクが君には必要なんじゃないの？」  
テラスの柵の上から僕は言った。

「そんな子どもっぽいもの、わたしには必要ないわ」  
顎をつん、と上げて少女は言った。  
床についていない足をぶらぶらと揺らす。

「ふうん」  
「早く大人になりたいの」  
唇を尖らせ、小皿のクッキーに手を伸ばした。もぐもぐと食べて、少しほっとした表情になる。

「焦らなくても、嫌でもなれるんじゃないかな」  
「年齢のことじゃないわ」  
大人びて、少女が言った。

「へえ」  
「そう言われたの」  
言葉尻が震えたので、彼女が泣きだすのかと、僕は身構えた。  
しかし、彼女は鼻をすすると、ぐっと眉を寄せて、ごくごくともう冷めたコーヒーを飲み干した。

「わかんない」  
悔しそうに、彼女が言った。

# トマトサラダ

---

包丁を持つ手がぶるぶると震えていた。

水色のペンキのはげた窓枠の、少し出っ張ったところに僕は腰かけて、そんな彼女の手元をはらはらと見守っている。

「危ないよ。指を切るよ」

彼女を驚かせないように、僕は慎重に口を挟んだ。

「ちょっと黙ってて」

涙目で、彼女が睨む。僕は口を開いてから閉じた。鼻からふうっと息を洩らす。

包丁の下、まな板の上にはみずみずしい一個のトマト。

赤い色。つやりと水滴の光るむっくりとしたフォルム。

昼下がりの明るいキッチンの中で、そこだけ切り取った絵画のように完成されていた。

「いくわよ」

彼女はまるでトマトが怖ろしいお化けであるかのように、ぶるぶると震える左手で、それを押さえ、ぶるぶると震える右手で包丁を当てた。

ごくり、と息を呑んで見守る。

「う。やっぱり駄目」

彼女は包丁をトマトから外し、一步退いた。

「もう諦めたら？ いいじゃないか、別に。サラダにトマトがなかったって」

「駄目よ」

これだけは譲れない、と彼女は首を振った。

「だって、彼が好きだって言ったんだもの」

唇を尖らせる。

やれやれ。まったく。どうしようもないね。

## おめかし

---

鏡台を、前のめりに睨みつけ、彼女はひどく真剣な顔をしていた。

右手には桃色の口紅。

瞬きもせず、鏡を睨みつけ、慎重な手つきで唇にそれを引いていく。

スローモーションで花が咲くように、彼女の唇が色づいていく。

僕は部屋の片隅でそんな彼女を見ながら、べしりと一度、尻尾で床を叩いた。

欠伸をするのを我慢したんだ。

彼女がそうして彩られていくのを眺めて、はや数時間。

最初は感心して眺めていたけれど、少し疲れてきた。まあ、見守っている必要はないんだけど。

部屋の中は、彼女のこの数時間の格闘の後で大変な有様だ。

いくつも引っぱり出してきた華やかなブラウスやスカートがあっちこちに散らばって、ネックレスやブレスレットにリボンなんかも箱からあふれ出している。

彼女は鏡の前に座って、右を向いたり、左を向いたり、ちょっと顎を上げてみたり、上目遣いをしてみたり、と忙しい。

僕はちらりと鏡台の上の時計を見上げた。

「時間は、大丈夫なの？」

はっ、と彼女が大きく目を見開いたのが、鏡越しに見えた。

椅子を倒して立ち上がる。

せっかくチークで明るくした顔から血の気がひく。

「大変！」

ばたばたと鞆を用意して、どうしようどうしよう、と言いながら、再度鏡の前に立つ。

「ううー。やっぱり、こっちのワンピースの方が良くないかな？」

まだそんなことを言うんだから、呆れちゃったよ。

「そんなことより、遅刻するよ」

尻尾で二度、床を叩いて、僕は親切に忠告する。

「そうだよ！ 急がなくちゃ！」

彼女ははっと我に返ったように、ばたばたと部屋を出て行く。

ばたん、ばたん、と大きく扉を開いたり閉じたりする音が響いたと思うと、玄関から彼女が走っていくのが見えた。

「あ」

僕は思わず口を開いたけれど、引き止める間もなく、彼女の姿はあっという間に小さくなってしまふ。

「あー、あ」

足元がいつものスニーカーだった。



テラスに置いた揺り椅子の上で、そのおじいさんは夢と現を行ったり来たりしていた。

ぼかぼかの良いお天気で、僕も欠伸がとまらない。  
屋根越しに見える空は青く高く、雲がゆっくりと流れていた。  
毛並みを撫でるような風が吹くと、かすかに花の香りがする。

花のいっぱい咲いた庭では、おばあさんが腰を曲げたり身を起こしたりしていた。花の手入れをしているのだ。三角巾のように頭に巻いたバンダナと後ろで結んだエプロンのリボンが風にひらひらと揺れる。

くしゅん、とおじいさんがくしゃみをした。

「寒い？ ひざ掛けをもっと上まで引っ張ったら？」

おじいさんの揺り椅子の隣の陽だまりで、丸くなっていた僕は顔だけちょっと持ち上げてアドバイスした。

「ああ、そうだねえ」

おじいさんは頷くだけで、少しずり落ちたひざ掛けはそのままだ。

開いたと思った目を、またうとうとと閉じる。

「風邪をひいても知らないよ？」

「ああ、大丈夫」

目を閉じたまま、おじいさんの口元が笑う。

そよそよと白いひげがそよいだ。

呼吸がだんだんゆっくりになっていくようだった。

「起きてる？」

僕は少し心配になって、声をかける。

「ああ、大丈夫」

もごもごとおじいさんは言った。

「おばあさん呼んでこようか？」

僕は立ち上がって言う。

「いや」ゆっくりとおじいさんは目を開いた。「僕は、この景色が好きでねえ」  
瞳はやさしく、花の手入れをするおばあさんを見つめている。

「そう」

「ああ、そうなんだ」

おじいさんは、瞳の中にその景色を閉じ込めるように、まぶたを下ろした。

暖かい色をした、タータンチェックのひざ掛けが、しずかにおじいさんの膝から滑り落ちた。

## 役立たず

---

噴水の縁に腰かけて、青年がクリームパンを食べていた。

「美味しい？」

僕は彼の足元で身づくろいをしながら尋ねた。

「うん。でも、明日からは食べられなくなっちゃうかもしれない」  
唇についたクリームをぺろりと舐めて、眦を下げて青年は笑った。

「何で？」

「仕事、辞めさせられちゃった。パン屋さん。全然値段を覚えられないって」  
駄目だねえ、と青年は笑う。

「その前はレストランの皿洗い。お皿を割ってばかりいて首になって。喫茶店のウェイターをやったこともあるけど、注文を間違えてばかりでもう来なくていいって言われちゃった。ははは」  
青年の笑みは朗らかで、湿っぽい鬚りは見えなかった。

「落ち込んでないの？」

「んー」

青年は困ったように、僕を見てから、空を仰ぐ。

「落ち込んでるよ？ でもね、昔、笑顔がいいねって褒めてくれた人がいたんだ。だから、それだけは、僕の自慢の取り柄だから」

精一杯、守っているんだ、と青年は笑った。

「確かに、いい笑顔だね」

「ありがとう」

青年の笑みは、青空に映えて実に清々しかった。

## 恋人たち

---

公園の入り口で、かれこれ30分ほど、青年が「あー」とか「うー」とか唸っているので、僕はなげなしの親切心を発揮せざるを得なかった。

「どうしたのさ？」

僕が問いかけると、青年は泣き出しそうな顔で、勢いよく振り向いた。

「彼女が、待ち合わせ場所に現れないんだ！ 公園の入り口で3時に会おうと言ったのに、もう5分も過ぎている！」

人差し指で青年が腕時計を叩きながら訴えた。

「5分くらい、ちょっと遅刻の範囲じゃないの？」

僕は話しかけたことをもうすでに後悔していた。

「彼女は真面目だから、いつも5分前には到着しているんだ！ 途中で事故に遭ったのか、それとも僕に愛想をつかしてすっぽかされたのかもしれない・・・もしそうだったら、どうしよう！」

おろおろと青年は肩を震わせる。

「彼女の家に電話でもしてみたら？」

後ろの公衆電話に僕は視線をちらりと向ける。

「僕のことを嫌いになったから来なくなかったと言われたらどうするんだ！」

僕のことを責めないでよ。

「さあねえ」

僕は目を細めて、尻尾をひとつ振ると、そのまま青年を置いて立ち去った。

静かな木陰を探して公園の反対側まで来ると、そこで一人の女性が「はー」とか「でも」とか唸っている。

関わりあうのはごめんだっただけ、成り行き上、僕は彼女に声をかけた。

「どうしたの？」

「ああ！ 彼が待ち合わせ場所に現れないんです。もう待ち合わせの時間を7分も過ぎているというのに！」

アクセサリのような時計をぎゅっと手に握りしめ、彼女は蒼白な顔だ。

「ちょっと遅刻しているだけじゃないの？」

「彼は律儀な方なので、遅刻なんてしません！ いつも5分前には着いているのに、どうしたのかしら。途中で何かあったのかも。ううん、わたしのことが嫌いになってしまったのかも・・・」

彼女は深刻な顔。しかし僕にはB級コメディだ。笑いそうになる顔を引き締めて、

「落ち着いて、公園を一周してきたら？」

と的確なアドバイスをした。

彼がここに来たら教えてあげるよ、と伝えると、迷いながらも彼女が立ち去る。

やれやれ。

彼女たちが手に手をとって戻ってこないうちに、僕はその場を退散することにした。

## お昼寝

---

前足にぐぐっと体重を乗せて、背筋をきゅうっと伸ばして、お尻を高く上げて尻尾をびん、と伸ばす。  
くわーっと口を開いて、目を細めて、ひげをそよがせる。  
顔をぶるぶると振ると、前屈みになって後ろ足を、いちにい、と伸ばしてやる。

前足で軽く顔を洗って、もう一度欠伸。尻尾をひとつ、くるりと回す。

ああ、良い天気だな。  
ほてほてと僕は空を見上げて歩き出す。  
魚のうろこみたいな、おいしそうな雲が泳いでいる。

あれを捕まえられないことは、賢い僕は知っているけれど、もしかしたら、気まぐれにちょっと降りてくるやつもいるかもしれない。

ひょいっと僕は塀の上に飛び乗った。  
うーん。まだまだ、遠いみたいだ。

ひょひょいっと僕は屋根の上に飛び乗った。  
うーん。ここでも無理か。一体どれだけ高いところにいるんだろう。

哲学者みたいに世界の謎を背負った顔で、僕は次の赤い屋根に軽く飛び移った。  
日なたの匂いがする。  
僕は胸いっぱいそのおいしい匂いを吸い込んだ。大きな欠伸がまたひとつ。

ちょっとここでお昼寝をしていこうかな。  
見渡すほかの屋根に、ライバルの猫はいないみたい。  
見下ろした庭には盆栽が並んでいて、子どもが住んではないみたいだ。  
落ち着いて昼寝をするには、好条件。

良い陽だまりを選んで、僕はくるりと丸くなる。  
ぬくぬくと陽光が体に集まってくる。  
薄く目をつむる。鼻から息を吸って吐いた。

少し冷気を含んだ風がひげをそよいでいく。  
どこかで誰かがピアノを弾いていた。  
小さなラジオの音。遠くで車の通る震動。小鳥が頭上を横切っていく。

空から間抜けな魚がたくさん降ってくる夢をみた。

## ピアノの君

---

彼女は体が弱くて、いつもベッドの上で本を広げていた。

土曜日の午後二時になると、僕は彼女の部屋の窓を紳士的に叩く。爪で傷つけるなんて、下手なことはしないさ。彼女は、僕のためにという口実で、窓を開ける。心優しい少女を装って、ミルクの小皿を僕の前に置いてくれる。

けれども僕のことなんか視界の端に入れてやしないんだ。うっとり両手を組み合わせ、聴き入っているのは、向かいの家から流れるピアノの音色。

「ねえ、聞かせて？ あの方は午前中には何をしたらしたの？ お昼には？ 昨夜はどんな夢をみたのかしら」  
彼女は綺麗な声で言う。きっと人間に生まれてこなかったら、ナイチンゲールになっていたに違いない。

「午前中には、温室のハーブの世話をしていたよ。お昼にはそのハーブでサンドウィッチを作ってた。昨夜どんな夢をみたかって？ そんなことまで知らないや」

僕は上等なミルクに舌鼓を打ちながら、ぶっきらぼうに答えた。

「素敵ねえ。ハーブがお好きなのね。それならわたし、ハーブの勉強をたんとするわ。だって、時間はもて余すほどにあるんですもの」

彼女は膝に置いていた分厚い本を閉じて、幸せそうに笑った。

それは野菜のカブの本だった。

先週、僕は『ピアノの君』がカブが好きだと言っていたと彼女に教えたのだ。

だからと言って、カブの植生を調べてどうするつもりなのだろう。

彼女があんまり幸福そうだったので、僕は口をつぐんでしまったけれど。

「いつかお会いしたいわ。お話したいことがたくさんあるの」

ピアノの音が止まる。

「お嬢さま、お菓子の時間です」

ドアが固くノックされる。

「はい」

彼女はその時初めて僕を見て、早く行って、と追い払う。僕が飛び退くと、すぐに窓はぴたりと閉じる。

見つかっては面倒なので、僕は素早く屋根の上に移動してから、落ち着いて顔を洗った。

さあて、次はカブが大嫌いで、温室なんて持っていやしない『ピアノの君』に『深窓の令嬢』のお話をしてあげなければ。

いつか二人に怒られる日が来ることを、僕は静かに祈っている。

## じれったい二人

---

日曜日の昼下がりに。  
公園のベンチで、恋人同士の彼と彼女が、肩を並べて座っていた。

僕は向かいのベンチで、気持ちよく日向ぼっこをしていた。

「良い天気ね」

「ああ、良い天気だね」

二人はそんな会話をしている。  
笑顔もぎこちなく、緊張している様子だ。付き合い始めたばかりなのかもしれない。

二人の間は猫一匹分。手は膝にお行儀よく乗せている。

「明日も晴れるかな」

「晴れると良いわね」

目を合わせることもままならないのか、二人とも、正面を向いて会話をしているので、まるで僕が話しかけられているみたいだ。

「明後日はどうかなあ」

「さあ、どうなのかしら」

いい加減、天気の話は止したらいいのに、と僕が欠伸ばじりに思っていると、彼女のほうの手が、おそろおそろ彼の手のほうへ伸ばされるのが見えた。

お、彼女、頑張るじゃあないか、とうんうん、と僕が感心していると、

「週間予報は信じるほうかい？」

彼が間抜けな質問をして、彼女はすぐさま手を引っ込めてしまう。

あーあー。そんなこと、どうでもいいよ。何てトンマな彼氏だろう。

「そうね。あまり信じないほうかしら」

ほら、彼女がちょっと沈んじゃったじゃないか。

と、今度は彼氏がそろそろと、膝に置かれた彼女の手に手を伸ばす。

そうだそうだ、ここで男を見せないよ。

「降水確率は、何%以上なら雨が降ると思っているの？」

今度は彼女の突飛な質問に、彼が慌てて手を引っ込める。

「そうだねえ。40%くらいかな」

ははは、と彼氏は空笑いをしながら、がっくりと肩を落とした。

似たもの同士、お似合いだよ。

せいぜいゆっくり進んでくれたまえ。

「良い天気だねえ」

「そうね」

ほんとうに、暢気なお天気だよね。

彼は煙草をふかしながら、奥さんの支度が終わるのを待っていた。  
車はすでに門の前に出してある。  
腕時計を見て、彼は眉をしかめた。

「まったく。あいつは支度に何時間かかっているんだ。自分の結婚式じゃああるまいし」  
いらいらと彼は煙草を携帯灰皿でもみ消して、次の一本に火をつけた。  
一張羅のタキシードに、煙草の匂いがついてしまいそうだ。

「誰の結婚式なの？」  
僕は門柱の上で体を丸めている。尻尾を彼の目の前に揺らしてみせた。  
「娘のだよ」  
彼は邪険に僕の尻尾を片手で追いやって、ふう、と白い煙を吐き出した。

「それはそれは、おめでとう」  
「とんだじゃじゃ馬な娘だったが、貰い手がいてまあ良かったな」  
「寂しくなるねえ」  
「口うるさいのが一人減ってせいせいするさ」  
彼は口元に皺を寄せたけれど、瞳は寂しいと言っていた。

「相手はどんな人なの？」  
「貿易会社に勤めてる男で、そうだな、ガタイがイイな。歯並びもイイ。温厚で誠実そうな男だったよ。あれじゃあしかし、俺の娘に尻に敷かれるのが目に見えるようだね」  
「へえ、良い人みたいだね」  
「そりゃあ、娘の選んだ男だからな」  
彼は自慢げに、鼻からふーっと息を吐いた。

「だがなあ」  
と、ごほんとして咳払いをする。  
「世界で一番娘を愛しているのはこの俺だ。それだけは譲らん」  
顎に皺を寄せ、巖のような表情を作る。

「・・・それ、娘さんには言わないほうがいいよ」  
僕は親切に忠告をしてあげた。

## 天体観測

---

彼は、天文台で望遠鏡を覗くのが仕事だった。

昼間は重たい暗幕みたいなカーテンを下ろした部屋でぐうぐう寝ていて、陽が沈む頃に起きだして仕事を始める。寝るときにかけていた毛布を引きずりながらコン口でお湯を沸かし、コーヒーを淹れる。そうして部屋の中央にある望遠鏡のところへ短い螺旋階段を上がっていき、小さな椅子に腰かける。コーヒーを啜りながら、角度やレンズの具合を調節して、あとは時々メモを取ったりぶつぶつ呟いたりしながら望遠鏡を覗き込んでいただけだ。

「毎夜毎夜、よく飽きないねえ」

僕は螺旋階段を軽快に飛び上がりながら彼の傍らに立って呆れたように見上げてみた。

「飽きるとか飽きないとかじゃあないんだよ。これは僕の仕事だからね」

淡々と彼は言いながら、少し誇らしげに眉をちょっぴり持ち上げた。

「ふうん。何を覗いているの？」

僕は一回尻尾をぱたりと振った。隕石が落ちてこないか見張ったり、宇宙人を探したり、そういう仕事なんだろうか。そうだったら少し面白そうだ。

「星を覗いている」

「それはそうだろうけど。星の何を覗いているのさ。宇宙人とかいた？」

「そんなものは探していない」

「じゃあ一体何を探してるの？」

「探すのは別の奴らの仕事さ。僕はただ、計算をするんだ」

「計算？」

「そうさ。天文学的な数字のね」

それは彼のとっときのジョークだったみたいだけど、残念ながら笑えなかった。

愛想笑いをするほど猫って親切じゃないんだ。

彼は肩をすくめて、コーヒーを啜った。

「見るかい？」

彼が勧めてくれたので、僕は彼が空けてくれた椅子の上にぴょんと飛び乗り、望遠鏡を覗き込んだ。無数の星の瞬きが見えた。

「綺麗だろう」

まるで彼の持ち物であるかのように自慢する。

「うん、綺麗だね」

同意をして頷くくらいには、猫って優しいんだ。

「この綺麗なものを計算するのが僕の仕事さ」

「そう」

羨望の眼差しを彼に向けるのは癪だったので、きらきら光る星々を代わりに見つめた。



## ナルキッソス

---

街外れの大きな大きな洋館に、そのお嬢さんは住んでいた。

彼女はとても美人だったので、毎日毎日、お花や宝石、ドレスやラブレターを男の人から贈られていた。

彼女は花瓶に飾られた花をうっとり眺めたり、指先で宝石をきらきらと輝かせたり、ドレスを鏡の前で合わせてみたり、ラブレターを読んでくすくすと笑ったり、そんな風に過ごしている。

「君は何か、贈り物にお礼をしたりはしないの？」

窓の縁に腰かけて、僕は尋ねてみる。

「お礼？ どうして？」

彼女は心底驚いた、というように、きれいな色の瞳を大きく見開いた。

長い睫毛をぱちぱちと瞬く。

「どうしてって、君はそんなに毎日贈り物をしてもらっているじゃないか」

「ええ。みんな私に贈りたいから贈るのだわ。贈られて嬉しいから、私もありがたうって受け取ってあげるのよ。それで充分じゃあないの？」

優雅に首を傾げると、耳につけた薔薇のイヤリングが上品に揺れた。

「うーん。間違ってるとは言いきれないけどさあ」

「だって、私、こんなに美人なんですもの。ひと目見たくて贈り物をしに来るのも当然じゃなくて？」

組んだ両手に顎を乗せ、彼女は唇に美しい円弧を描く。

これで説得力があるのだから仕方ない。

「幸せそうだねえ、君」

「あら。当然だわ、そんなこと」

彼女の浮かべた笑みは、文句なしに魅力的だった。

# 聴く人

---

彼はとっても変な人だった。

ある日は、公園の木に抱きついて幹に耳を押しつけて、通りがかった犬に吼えられるのを目撃した。

またある日には、街中のショーウィンドウに耳を押しつけて、お店の人に怒られていた。

そしてまたある日には、道端の小さな花に耳を寄せて、車に轢かれそうになっていた。

そして今日は野原で大の字に寝転がり、じっと目を閉じている。

氷を含んだような冷たい風が乾いた草原を揺らして、彼はくしゃんとくしゃみをした。

「真冬なのに、こんなところでお昼寝？ 風邪を引くよ？」

僕は彼の顔の横に立って言った。

彼はこの空みみたいなアイスグレーの瞳を僕に向けて、赤くなった鼻を指でこする。

「今日はこれから雪が降るんだ」

「天気予報士？」

「空気の音を聴いてごらんよ。雪が降る雪が降るよって言うてる」

「何なのそれ？」

僕は鼻をしかめたが、彼は笑っただけで答えなかった。

試みに、耳を澄ましてみる。

冷たい風の音が聞こえるだけだった。

しかし、見上げた空にはどんよりと重い雲が広がっていて、確かに雪が降りそうな気配ではある。

くしゅん、と彼がもう一度くしゃみをした。

「雪が降るからって、こんなところで寝転がらなくてもいいんじゃないの？ 風邪を引くよ」

「雪の降る音を聴きたくって」

「雪の降る音？」

「そう。君は聴いたことがあるかい？」

「ないけど」

そもそも、音がするとは思えない。雨じゃあないんだから。

「僕もだ。だからどうしても聴きたくって」

彼は空を見上げて、白い息を吐き出した。

どうしてもここから動かないつもりらしい。

やれやれと僕は肩をすくめた気持ちになると、のそのそと歩いて、彼のお腹の上ののっかってくるりと丸くなった。猫は体温が高いから、寒さも少しはマシになるだろう。

「何？ どうしたの？」

「君の音を聴いてるんだよ」

へえ、どんな音がする？ と彼は笑った。



## 花畑管理人

---

彼は、牧場と同じ丘にある、花畑の管理人だった。

放牧の牛や羊に踏み荒らされないように立てた柵に肘をかけて、指を上げて説明してくれる。

「あそこは菜の花。もうすぐ咲くよ。黄色い絨毯みたいになる。あっちはチューリップ。今年は外来種の球根も植えたから、色々な花が見られるよ。それからあっちはクロッカス、サクラソウ、鈴蘭、向日葵、は夏まで待たないといけな  
いけれど」

愛おしそうに語る彼の瞳には、すでに色とりどりの花畑が見えているようだった。

「そう」

彼は頷いた。彼の指差すとおり視線を動かせば、まだ咲かない花が次々と咲いていくようだった。すん、と鼻から空気を吸い込めば、まだ冬の気配を残した冷たさに、ちよんとくしゃみが出る。

「水を撒いて、肥料をやって、雑草を抜いて。この仕事は僕の誇りなんだ」  
胸を張って、彼は頬にえくぼを作った。

町ではこの花畑をつぶして、大きな工場を作ろうという計画が出ているらしい。

カラス達がそんな噂話をしていた。

計画をしている人たちは知らないんだろう。地図には彼の色とりどりの花畑はうつらないから。

「素晴らしい仕事だと思うよ」

「ありがとう。でも、素晴らしいかどうかはわからないな」

柵に乗せた手に、彼はあごをうずめた。

「工場は役に立つものを作るけれど、花はどうだい？」

「きれいだ」

僕の返答に、彼は眉を動かして、鼻から息を吐き出した。

「確かにそうだ」

「それだけではいけないの？」

「さあ、どうなんだろうね」

「僕は春になったら君の花畑に本当に花が咲くのを見たいな。夏の向日葵も」

「ありがとう」

彼は頬にえくぼを作って、新しい種をまくために、柵の内側へ入っていった。

## 春告鳥

---

「ケキヨ」

という変な声が頭上の枝から聞こえたので、昼寝を邪魔された僕は、

「何なの？」

と多少不機嫌な声で、顔を上げた。紳士だから、表情に不機嫌は出ていなかったと思う。

「ぎゃ。猫、猫っ」

そいつは枝の上でぴょんぴょんと跳ねて、僕の頭上に木の葉を散らした。

「落ち着きなよ。取って食べたりしやしないさ」

僕は屋根の上で丸くなったまま、できるかぎりの猫なで声を出した。

「本当？ じゃれて遊ばれるのも嫌だぞ？」

ぴょんぴょん飛ぶのはやめてくれたそいつが、屋根の上に張り出した枝の上から、恐る恐るこちらを見下ろす。

「君が僕の昼寝の邪魔をしないなら、もちろん、そんなことはしないと約束しよう」

おやまあ、とそいつは一度くすんだ緑色の羽を広げて閉じた。

「そいつは悪かった、悪かったよ。だけど、仕方ないって、あなたさんも納得してくれるよ、うん」

そいつは一人で頷いてから、どうだい同意だろう、というように僕に首を傾げてみせた。

「僕の昼寝よりもそれが重要なことならね」

僕は寛容に応じてやる。今日は暖かくて、とても気持ち良かったから、気難しくなるほうが難しいというものさ。

「練習をしていたんだ。何の練習か、さてさて分かりますかなあ？」

そいつは鳩みたいに胸を逸らす。孔雀のつもりかもしれない。

「興味ないな」

僕は前足で顔を洗った。とことん昼寝の邪魔をするつもりなら、こちらも容赦はしないぞ、とちらりと爪を見せる。

「春を呼ぶ、練習です」

はきはきとそいつは答えた。

「春を呼ぶ？ 君が？」

僕が少し興味を持ったのに気がつくと、そいつは再び鳩になる。

「そう、華麗な歌声で、春の女神をお導きするのです」

「へえ」

ふふん、とそいつは僕を見下ろして、再び「ケキヨ」「ホホ」と変な声を出し始めた。

「華麗な歌声、ねえ」

「だから、今は練習中なんだ」

それなら他所でやってくれないかな、と僕は爪を出しかけて、そいつのとまる枝の先っぽに微かにほころんだ赤い梅の花を見つけて、仕方なく爪を引っ込めた。

「ホケッキョ」

下手な歌声でも、春の女神は呼ばれていることに気がついてくれているみたいだ。きっとやさしい女神なんだろう。

## 最後のページ

---

みーさんのところへ僕が戻ると、彼女はちょうど一冊の本を読み終えたところのようだった。

ぱたりと閉じた本を胸に抱いて、幸福そうなため息をつく。

ちょうど良い時に帰ってきたな、と僕は思う。何しろみーさんは読書中にはちっとも僕の相手をしてくれないのだ。

「はぁ。読み終わっちゃった。この幸せな満足感と寂寥感って何とも言えないわ。ねえ、あなたもそう思うでしょう？」

最後の言葉は僕に向けられたものだ。

「今度は何を読んでいたの？」

僕はひょいと彼女の膝に飛び乗る。ずっとテラスで読書をしていたらしいみーさんのスカートは陽だまりの匂いがした。

「ドラゴンに攫われた王子さまをお姫さまが助けにいくお話なの」

「なんだい、ありきたりだなあ」

「そう？ とてもおもしろかったわ」

「月の石の作り方を知っている？」

「いいえ、知らないわ」

みーさんが目を丸くする。

僕は得意そうにひげをそよがせる。

「それじゃあ話してあげよう。時間を止めた薔薇のお話も、天文台で星の計算をしている人の話もあるよ」

「まあ」

話して話して、とみーさんは瞳を輝かせる。

「良いよ。じゃあ、月の作り方の話から」

僕はみーさんの膝の上に気持ち良く丸くなる。

まだみーさんの知らない新しい物語のページをめくった。